国営伊那西部農業水利事業

――緊急発掘調査報告――

名廻・北丘B・柳沢・山の下遺跡

1985

伊那市教育委員会
関東農政局伊那西部農業水利事業所

国営伊那西部農業水利事業

——緊急発掘調査報告——

名廻・北丘B・柳沢・山の下遺跡

1985

伊那市教育委員会
関東農政局伊那西部農業水利事業所

序

原始・古代人達は天竜川，天竜川の支流，さらに周囲に取りまく山々を含めた自然環境に応じた生活を営んでいたことと思う。こうした生活の跡が現在は遺跡という形で残されています。中世人達は自然を巧みに利用して城館を築いています。

現在，西春近地区内で周知されている遺跡は80カ所，城館は19カ所を数えます。これらの多くは，中央自動車道・道路開発・宅地造成・工場・土地改良事業等々の開発の波のなかで，すでに破壊されたり，また破壊されようとしています。

この発掘調査は，関東農政局伊那西部農業水利事業所によって行われる西部送水管付設工事事業による。

晩秋の寒さ厳しき折り調査に努力された団長友野良一先生，調査員各位，作業員各位，調査の進行に多くの便宜をはかって下さった関東農政局伊那西部農業水利事業所職員一同，地元土地改良区役員，地権者各位に対し，深く感謝の意を表します。

最後に，今後，この報告書が大いに活用されることを要望します。

昭和60年2月

伊那市教育委員会

教育長　伊沢一雄

まえがき（名廻・北丘B・柳沢・山の下遺跡の環境）

位　置

名廻遺跡は長野県伊那市西春近白沢に，北丘B遺跡は伊那市東春近木裏原に，柳沢遺跡は伊那市西春近柳沢に，山の下遺跡は伊那市西春近井の久保にそれぞれ所在している。遺跡地の現況は名廻遺跡では桑畑，山林，北丘B遺跡では桑畑，柳沢遺跡は山林，桑畑，山の下遺跡では山林，桑畑に利用されている。

遺跡地の広がっている標高の概数は次のようである。名廻遺跡は715m～725m位，北丘B遺跡は720m～730m位，柳沢遺跡は715m～725m位，山の下遺跡は680m～690m位である。名廻・北丘B遺跡は犬田切川に，柳沢遺跡は猪の沢川に，山の下遺跡は藤沢川にそれぞれ面している。これらの三河川は天竜川の支流をなしている。

遺跡地に至る道順を遺跡別に記してみる。名廻遺跡は国鉄沢渡駅で下車し，国道153号線を北へ向って5分程行くと，犬田切川がある。この川を渡って最初の三叉路を左折し，西方へ向って15分程歩るくと中央自動車道がみえる。この付近が名廻遺跡である。北丘B遺跡は名廻遺跡からみて犬田切川の対岸である。北丘B遺跡へは沢渡から西方へ登る方が最短距離である。

柳沢遺跡は飯田線沢渡駅で下車し，国道153号線を南へ向って徒歩で10分程行くと，伊那バス柳沢入口の停留所がある。この停留所の北側に流れている川が猪の沢川である。停留所付近を左折してダラダラ坂を登って15分程歩るくと柳沢部落があり，この部落の北はずれが遺跡地である。柳沢部落の南はずれに藤沢川が流れており，対岸が山の下遺跡である。

地形・地質

伊那市西春近地区の地形を考えてみるに大きく分けて三条件の成因があると思われる。その条件は天竜川，三峰川等々によって形成された沖積世面，天竜川及び天竜川の支流（北から小黒川，戸沢川，小戸沢川，犬田切川，猪の沢川，大洞，前沢川，藤沢川，堂沢川，大沢川）によって形造された河岸段丘面（いわゆる洪積世台地面），木曽山脈の前山である権現山より展開する山麓扇状地面である。今回，調査した遺跡地付近の地質をごく簡略に記してみると次のようになる。

名廻遺跡は安定したローム層が深く堆積した。北丘B遺跡は名廻遺跡同様であった。柳沢遺跡は猪の沢川や山麓の押し出しが何度もあったとみえて，大きな礫や砂層が厚く，ローム層に達するには相当深いものと思われる。山の下遺跡付近は藤沢川の氾濫によると思われる砂や礫が堆積していた。

最後に，名廻遺跡，柳沢遺跡付近の地質のボーリング調査結果を掲載しておく。この資料は関東農政局伊那西部農業水利事業所によるものであることを記しておく。担当職員に感謝致す次第であります。

標尺	標高(M)	深度 G.L (M)	層厚(M)	土質記号	土質名	色調	観察記事
	717.56	0.00					
0 1	716.46	1.10	1.10		表土	暗茶褐	0～0.25m付近間、玉石混入 少量の草根、木根混入 少量の礫φ 20～40㎜混入 粘性土主体とする
2 3 4	712.81	4.75	3.65		粘土 凝灰質	暗褐	少量のスコリア、浮石混入 所々細礫φ 0.5㎜混える
5	712.24	5.32			転石混り砂礫	暗灰	4.50～4.65m付近間、砂礫(φ 20～50㎜)混入 礫は亜角状である 4.70～4.95m付近間、花崗岩混入、全体に安山岩主体とする
6 7							

標尺	標高(M)	深度 G.L (M)	層厚(M)	土質記号	土質名	色調	観察記事
	716.31	0.00					
0 1 2 3	712.61	3.70	3.70		玉石混り砂礫	黒褐 暗灰	0.50m草の根混入 下部φ 50㎜位の礫を主体とするものに変る 玉石はφ200㎜以上と思われる花崗岩及び安山岩であり、非常に硬質である 1.50mよりφ 80～100㎜位の玉石の連続となる 2mより20cm位の礫の少な目な部分見られる 又、2.80mより15cm位の礫あり
4 5	711.11	5.20			砂礫	暗灰	φ 20～50㎜位の礫を主体とし所々φ 50～80㎜位の安山岩又は、花崗岩を混入 マトリクスはシルト分含むものである
6 7							

土層柱状図（名廻遺跡付近（上）　柳沢遺跡付近（下））

周辺遺跡の分布状況

西春近中・南部地区で現在確認されている遺跡は49カ所を数える。これら49カ所の遺跡のうち8割はすでに諸開発に伴なって緊急発掘調査が実施されている。遺跡の内容は先土器時代から江戸時代の長きにわたっている。　（飯塚政美）

西春近中・南部地区遺跡分布図　（1：50,000）

遺跡の名称

①名廻西古墳	②名廻東古墳	③名廻南	④児　塚	⑤鎮護塚西古墳
⑥鎮護塚東古墳	⑦カンバ垣外	⑧丸　山	⑨南小出南原	⑩薬師堂
⑪唐木原	⑫唐木古墳	**⑬名　廻**	**⑭北丘B**	⑮北丘A
⑯北丘C	⑰南丘B	⑱南丘A	⑲南丘C	⑳眼子田原
㉑山の神	㉒上の塚	㉓沢渡南原	**㉔柳　沢**	㉕下小出原
㉖天伯原	㉗南　村	㉘東　田	㉙天　伯	㉚井の久保
㉛表木原	**㉜山の下**	㉝菖蒲沢	㉞富士山下	㉟富士塚
㊱広垣外Ⅰ	㊲広垣外Ⅱ	㊳鳥井田	㊴高遠道	㊵西春近南小学校付近
㊶安岡城	㊷城の腰	㊸横　吹	㊹和　手	㊺上手南
㊻宮入口	㊼寺　村	㊽下　牧	㊾下牧経塚	

凡　例

1　今回の緊急発掘調査は西部開発に伴う，西部送水管事業で，第５次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

2　この調査は，西部送水管事業に伴う緊急発掘で，事業は関東農政局伊那西部農業水利事業所の委託により，伊那市教育委員会が実施した。

3　本調査は，昭和59年度中に業務を終了する義務があるため，報告書は図版を主体とし，文章記述もできるだけ簡略にし，資料の再検討は，後日の機会にゆずることにした。

4　本文執筆者，次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

◎図版作製者

- 遺構及び地形実測図　　飯塚政美
- 土器拓影　　飯塚政美
- 石器実測　　飯塚政美

◎写真撮影

- 発掘及び遺構　　飯塚政美

5　本報告書の編集は主として伊那市教育委員会があたった。

6　出土した遺物や遺構・遺物の図面類は伊那市考古資料館に保管してある。

発掘調査の経過

発掘調査の経緯

西部開発事業の一環として，竜西地区に送水管を農林水産省直轄のもとに付設する計画が実施されて徐々に工事が進ちょくしている。伊那市においては，西箕輪，西春近，伊那地区がこれに該当し，昭和50年度に西箕輪大泉新田塚畑遺跡，昭和51年度に西箕輪羽広財木遺跡，金鋳場遺跡，昭和54年度に西箕輪上戸宮垣外遺跡，西箕輪中条天庄Ⅱ遺跡，堀の内遺跡，小花岡遺跡，昭和55年度に西箕輪吹上桜畑遺跡の調査が行われてきた。昭和57年度は伊那船窪，船窪遺跡，西町大坊城畑遺跡，西春近山本城平遺跡，宮林遺跡，山の根遺跡，昭和58年度は西春近宮の原大境遺跡，中原遺跡，西春近細ケ谷細ケ谷Ｂ遺跡の緊急発掘調査を行った。

本年度は名廻遺跡，北丘Ｂ遺跡，柳沢遺跡，山の下遺跡の発掘調査を実施するようになった。

昭和58年９月１日　長野県教育委員会文化課小林指導主事が来伊し，伊那市教育委員会社会教育課職員，関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と三者協議を混じえながら予算査定を行う。

昭和59年7月24日～26日　24日は白沢会所，25日は木裏原会所，26日は柳沢会所で夜，地権者と打ち合せをする。伊那市教育委員会職員と関東農政局伊那西部農業水利事業所職員が出席する。

昭和59年8月3日　伊那市長と関東農政局伊那西部農業水利事業所長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し，契約後，ただちに発掘準備にとりかかった。

昭和59年9月14日　関東農政局伊那西部農業水利事業所職員と伊那市教育委員会社会教育課職員立合いのもとに発掘調査地区に境界用のテープを張る。

昭和59年9月21日　伊那市教育委員会社会教育課職員が地権者宅を訪問し，発掘承諾書に署名，捺印をしてもらう。

調査の組織

名廻・北丘B・柳沢・山の下遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	山口豊	伊那市教育委員長
調査事務局	小林勝	伊那市教育委員会教育次長
〃	竹松英夫	〃　社会教育課長
〃	柘植晃	〃　〃　課長補佐
〃	武田則昭	〃　〃　係長
〃	高木いずみ	〃　〃　主事

発掘調査団

団長	友野良一	日本考古学協会会員
副団長	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
調査員	福沢幸一	〃
〃	飯塚政美	日本考古学協会会員
〃	小池孝	〃

作業員名簿

酒井岩夫　池上大二　三沢寛　大野田英　建石紀美子　大野田三千代　網野実子　埋橋程三　後藤重美　大久保富美子　酒井とし子　唐木由人　柴佐一郎　北原一喜（敬称略順不同）

名　廻　遺　跡

目　　次

目　　次……（1）
挿図目次……（1）
図版目次……（1）

第Ⅰ章　発掘日誌……（2）

第Ⅱ章　遺　　構……（2）

第Ⅲ章　遺　　物……（4）

第1節　土　　器……（4）

第Ⅳ章　ま と め……（4）

挿図目次

第1図　地形及びグリット配置図……（3）
第2図　土器拓影……（4）

図版目次

図版1　遺跡遠景
図版2　グリット発掘状況

第Ⅰ章　発掘日誌

昭和59年９月27日　晴　伊那市考古資料館にて道具の整備をする。

昭和59年９月28日　晴　午前中，伊那市考古資料館にて発掘器材の整備をする。午後は発掘器材を現場へ運ぶ。

昭和59年９月29日　晴　現場へテントを建てる。グリット打ちをする。

昭和59年10月４日　晴

グリット掘りを実施する。名廻遺跡の中央部付近に東西に溝が走っているが，その北側の桑畑を掘る。ローム層までは50㎝～１ｍ位とまちまちであった。層位は黒土層から，そくローム層であった。遺物はわずかに土器片が２片出土した。

発掘風景

昭和59年10月５日　晴　溝をへだてた南側の原野を市松状に掘り下げていく。大きな石が点在していたが何んら遺構には関係ないと思われる。ローム層までは30㎝位であった。遺物はわずかに土器片が一片出土しただけであった。

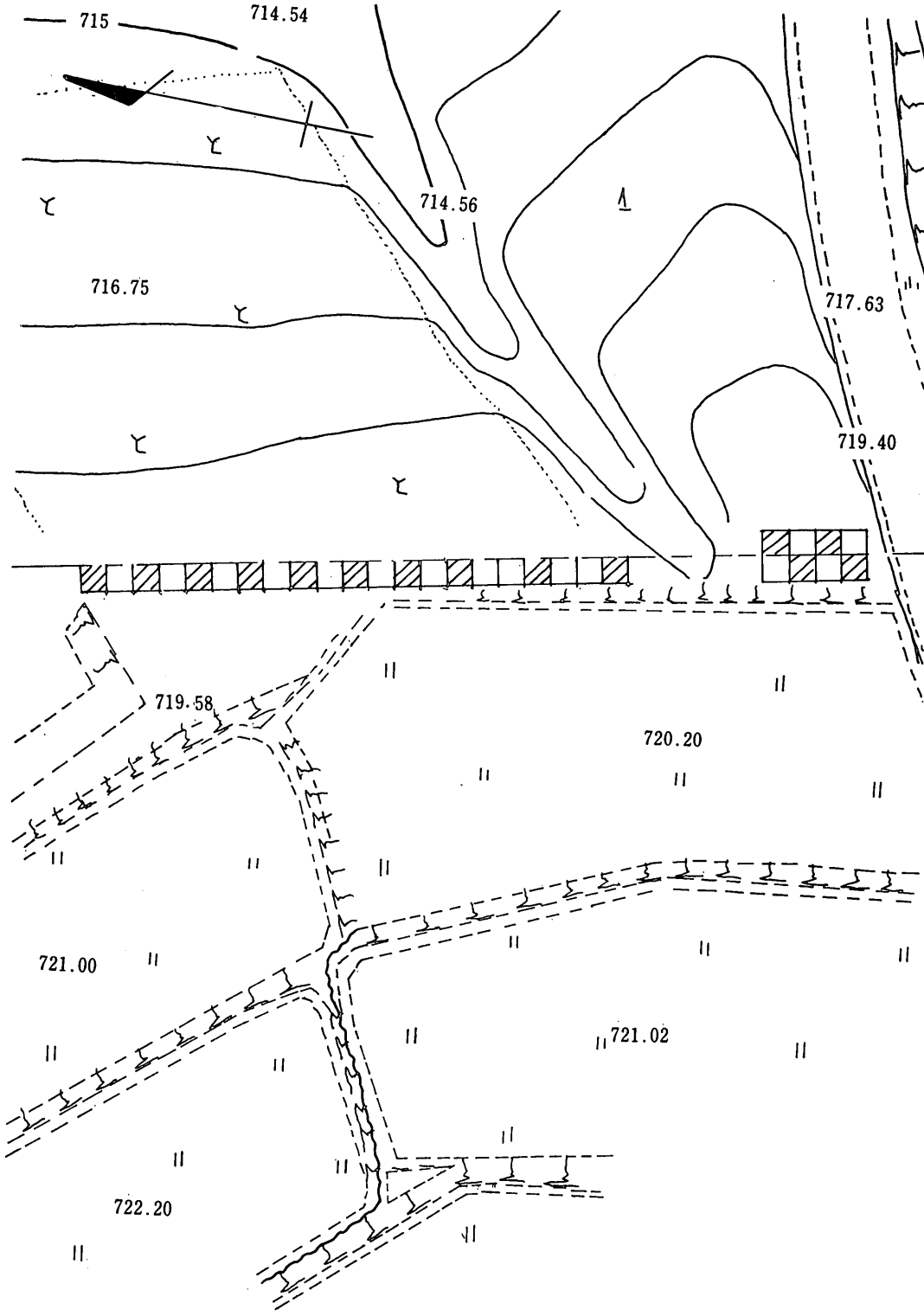
昭和59年12月～昭和60年１月　図面の整理，原稿執筆，報告書の編集，それを印刷所へ送る。

昭和60年２月　報告書を刊行する。

第Ⅱ章　遺　　構

今回の発掘調査地区内での遺構の検出は全くなかった。

（飯塚政美）



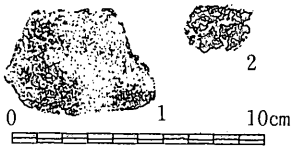
第１図　地形及びグリット配置図　（１：500）

第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　　器

今回の発掘調査で出土した土器は3片のみであった。（第2図の1）は無文である。胎土中に多量の雲母・長石を含み，焼成は良好であり，赤褐色を呈す。器厚は6㎜程を測る。以上からして縄文晩期土器片と思われる。

同図の（2）は無文である。胎土中に多量の繊維を含み，焼成は不良，赤褐色を呈す。器厚は7㎜位を測る。縄文早期末葉の土器片と思われる。



第2図　土器拓影

第Ⅳ章　ま　と　め

名廻遺跡の発掘調査は今回の調査で二度目になる。第1回目の発掘調査は昭和47年度中央自動車道開通の時であった。この時の調査結果は日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会刊行「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（伊那市西春近）」昭和47年度の中にまとめられている。

この報告書の中で記載されている調査結果は次の通りである。繊維を含む粗大楕円押型文，口唇に長い刻目があり，繊維を含まない楕円押型文の出土。平安時代の方形竪穴住居址が検出され，なかから灰釉陶器埦，土師器杯，甕，須恵器壺等々が出土した。その他，溝状遺構。

今回の調査は幅5mと限られた用地内の調査であったので，当初期待した程の成果はあがらなかった。遺構の検出は何もなく，わずかに土器3片の出土にとどまった。第2図に掲載した土器のうち（1）は縄文晩期大洞系統，（2）は茅山系統と思われる。

最後に，各種方面でいろいろお世話になった各位に対し厚くお御礼申し上げます。

（飯塚政美）

図版1　遺跡遠景

遺跡地を南側より眺む

遺跡地を西側より眺む

図版2　グリット発掘状況

溝より北側のグリット

溝より南側のグリット

北丘B遺跡

目　　次

目　　次……(1)
挿図目次……(1)
図版目次……(1)
第Ⅰ章　発掘日誌……(2)

第Ⅱ章　遺　　構……(3)

第1節　土　　壙……(5)

第Ⅲ章　遺　　物……(6)

第1節　土　　器……(6)
第2節　石　　器……(6)

第Ⅳ章　ま と め……(7)

挿図目次

第1図　地形及び遺構配置図……(3)
第2図　第1～3号土壙実測図……(5)
第3図　土器拓影……(6)
第4図　石器実測図……(6)

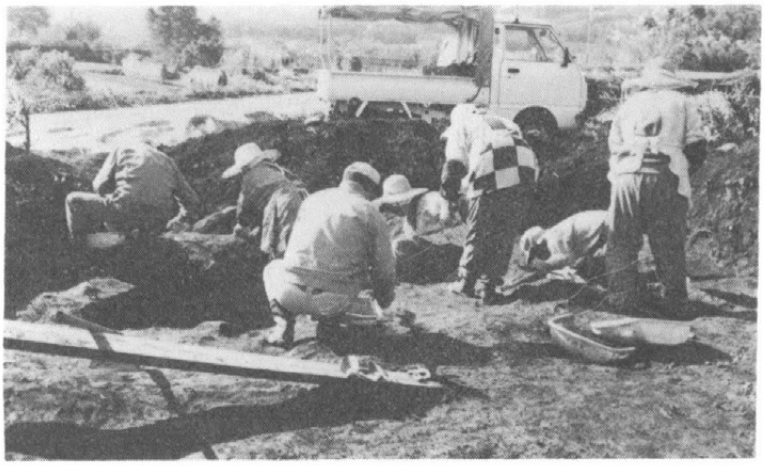
図版目次

図版1　遺跡遠景
図版2　グリット発掘状況
図版3　遺構及び遺物出土状況

第Ⅰ章　発掘日誌

昭和59年10月６日　晴　木裏原の現場，つまり北丘Ｂ遺跡へテントを建てる。今回の調査地点は中央道の路線より東へ約100ｍ位の所に位置している。テントを東西に走る市道に面した場所，用地内の最も南側の牧草畑に南北に長く２張り建てる。

昭和59年10月８日　曇時々晴　本日より掘り始じめる。桑畑だったので桑のうねを利用したグリットを設定する。その規模は東西１ｍ，南北２ｍとし，一つおきに掘ることにする。ローム層まで浅いところで50㎝，深いところで１ｍであった。土器片は数片出土したのみであった。



発掘風景

昭和59年10月９日　曇　昨日と同様な方法でグリット掘りを南へと進めていく。遺物は土器片と石器片が数片出土したのみであった。

昭和59年10月11日　曇時々晴　昨日と同様な方法でグリット掘りを南へ，南へと進めていく。土器片はわずかに出土した。本日で，掘り始めて３日となるが遺構の検出は何もなかった。

昭和59年10月12日　曇時々晴　昨日と同様グリット掘りを南，南へと進めていく。土器片はわずかに出土した。遺構の検出は何もなかった。

昭和59年10月13日　曇時々晴　本発掘予定地の最も南側付近のグリットを掘り下げていくと，黒土が落ち込んだ土壙状の遺構がみられ，これを第１号土壙，第２号土壙，第３号土壙とする。

昭和59年10月15日　曇時々晴　昨日検出された土壙のプランを確認する。

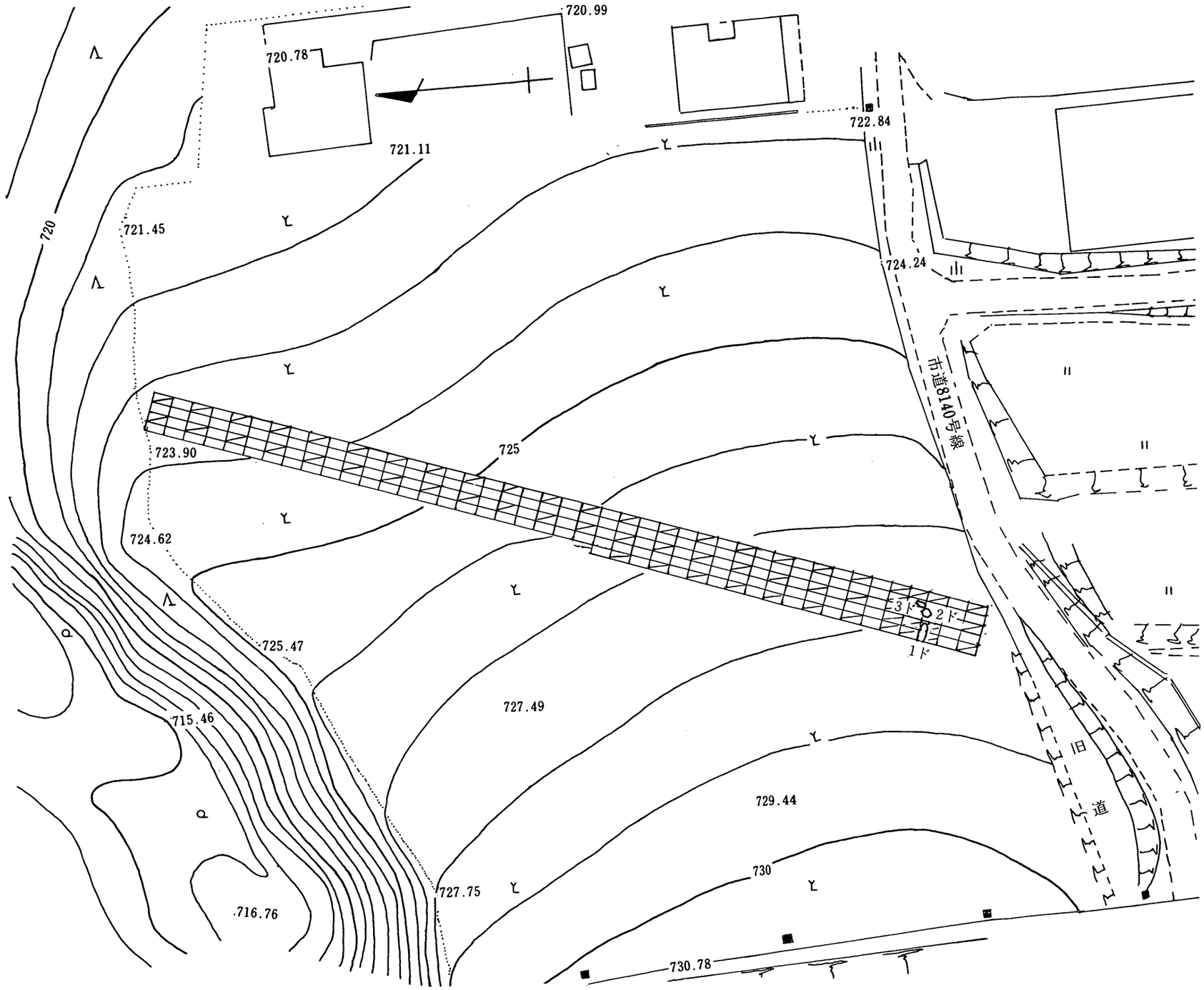
昭和59年10月16日　曇時々晴　昨日同様土壙のプラン確認につとめる。夕方までにプラン確認を終了する。最も西側を第１号土壙，中間を第２号土壙，最も東側を第３号土壙とする。

昭和59年10月22日　晴　第１号土壙から第３号土壙の掘り下げを完了する。写真撮影を済せる。第１号土壙から第３号土壙までの平面実測を終了する。

昭和59年10月23日　晴　第１号土壙から第３号土壙までのレベルをとる。全測図の作製。明日，柳沢遺跡へ移動するので，その準備をする。

昭和59年12月～昭和60年１月　図面の整理，原稿執筆，報告書の編集，報告書を印刷所へ送る。

昭和60年２月　報告書を刊行する。　（飯塚政美）



第１図　地形及び遺構配置図（１：500）

第1節　土　　壙

今回の調査で検出された土壙は3基である。これらを西側から第1号土壙，第2号土壙，第3号土壙とした。三基の土壙は近接して検出された。

第1号土壙　（第2図，図版3）

本土壙検出面までは表土面から60cm位あった。ローム層を掘り込んだ土壙であり，西側は用地外のために調査は不可能であった。南北1m5cm，東西1m5cm位で，ところどころ角張ったやや方形状に近い平面プランを呈す。壁高は20～40cm位を測る。南壁は外傾気味，細礫が壁面に入っており，軟弱気味を呈す。北壁は垂直気味を呈し，軟弱であった。西壁は垂直気味，軟弱気味。東壁はやや外傾気味で，若干段がつく。軟弱状態であった。

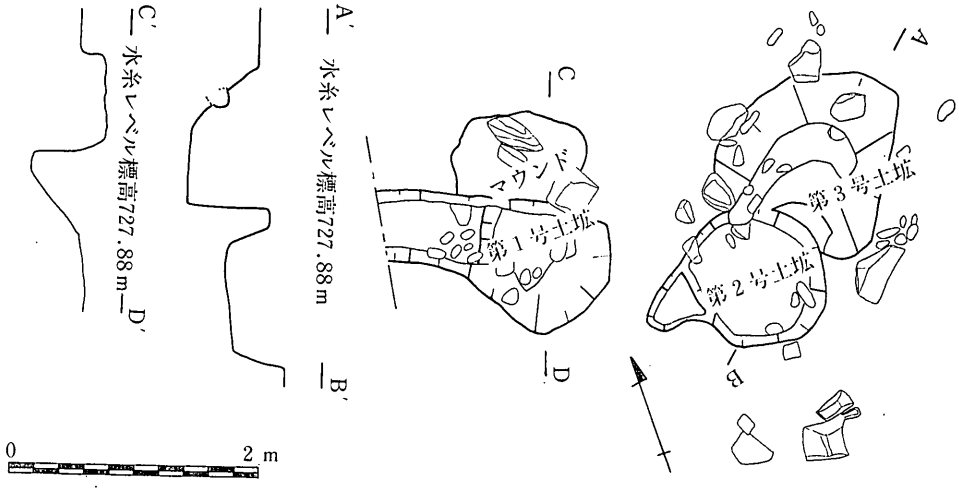
床面はほぼ水平で，ややかたかった。遺物の出土は何もなかった。北側にマウンド状の遺構があった。

第2号土壙　（第2図，図版3）

本土壙は円形状プランを呈し，南北1m15cm位，東西1m5cm位を測る。壁高は20～40cm位を計り，やや外傾気味を呈し，礫を含み，やや堅い。礫は変成岩が多い。床面は若干凹凸があり，堅い。西側に三角形状の段がつく。遺物は何も出土しなかった。従って時期決定には至らなかった。北西のわずかな部分で第3号土壙に切られているところがあった。

第3号土壙　（第2図，図版3）

本土壙はローム層を掘り込んで構築されている。南北1m50cm，東西1m30cm程の規模を有す。平面プランは東側で辺状に，西，北は若干カーブを描く。壁高60～70cmを計る。壁面は南側で垂直に近く，北側は傾斜が強い。全般的に壁面に多くの礫を含む。床面はかたく大般水平で礫を多く含む。遺物の出土は何もなかった。　（飯塚政美）



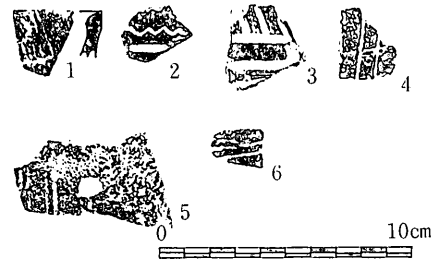
第2図　第1～3号土壙実測図

第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　　器（第3図）

今回の発掘調査で出土した土器は10数片あったが，そのうちで，文様が付いていて，拓本をとって様になる土器片6片を掲載しておく。

（1）は内そぎ気味の口縁部破片である。口唇部から下部にかけて細い沈線をわずかな傾斜で斜走させてある。少量の長石を含み，焼成は普通，赤褐色を呈す。（2）は破片中央部に沈線を山形状に意匠し，下部には幅広ろの沈線が横走している。少量の長石を含み，赤褐色を呈し，焼成は普通である。



第3図　土器拓影

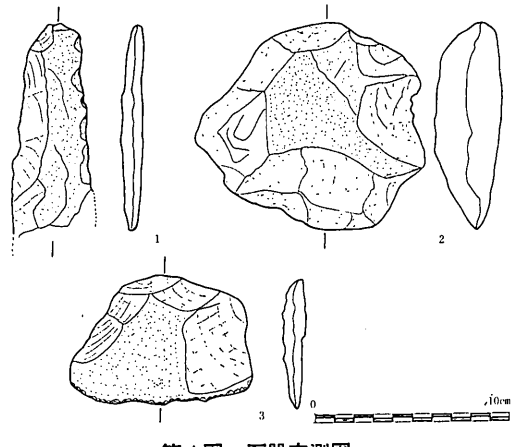
（3）は破片上部から中部にかけて幅広の沈線が右斜目下がりで斜走，中部に低い隆帯が横走，隆帯直下に沿って幅広ろの浅い沈線が横走している。赤褐色を呈し，少量の長石を含み，焼成は普通。（4）は無文地に細くて深い沈線が縦走している。赤褐色を呈し，細かな長石を含み，焼成は良好である。

（5）は器面全体が荒れてザラザラしていた。わずかに破片左下隅に沈線が縦位にある。中央の凹みはこわれているところである。赤黄褐色を呈し，多量の雲母を含み，焼成は不良である。（6）は器厚が5㎜と比較的薄くこしらえてある。細くて，深い沈線が二条横走している。黒褐色を呈し，焼成は良好。

これらを時期的にみてみると，（1）は縄文中期初頭，（2～3）は縄文中期中葉，（4～5）は縄文中期後葉，（6）は縄文後期中葉に位置づけられると思われる。

第2節　石　　器（第4図）

今回の調査で出土した石器は全てで6点であった。それらのうちで比較的良好なのを第4図に掲載した。（1）は打製石斧で短冊型を呈し，下部が欠損している。硬砂岩を利用。（2）は礫器であり，硬砂岩を利用している。比較的調整が雑である。（3）は硬砂岩を利用した横刃型石器である。刃部は比較的丁寧につくり出されている。他には硬砂岩製の打製石斧2点，硬砂岩製の砥石1点があった。　　（飯塚政美）



第4図　石器実測図

第Ⅳ章　ま　と　め

北丘Ｂ遺跡の発掘調査は前述した名廻遺跡同様２回目である。第１回目の発掘調査は昭和47年度に実施された。発掘調査の動機となった理由は中央自動車道が通るとのことであった。調査結果は日本道路公団名古屋支社・長野県教育委員会刊行「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（伊那市西春近）」昭和47年度の中に掲載されている。それによると次のようになる。

縄文中期竪穴住居址９軒，縄文中期竪穴４基，縄文中期土壙群２基，縄文中期土壙12基であった。その他，縄文早期末葉，穀粒押型文土器口縁部破片，太めの撚糸文土器で繊維を含んでいる。この調査は集落構造論を展開するのに大いに役立った。その理由として，住居址に付随して竪穴があること。竪穴の中には単なる貯蔵穴的な竪穴と，第４号竪穴のように，多量の黒耀石片が出土し，工房址的な色彩が強かった。９軒の住居址の外側に２つの土壙群がとりまき，その中に土壙12基があり，いわば，住居地域と墓域地域とが明確であった点である。

今回の調査は当初は前述した事例があるから，実際に発掘調査を実施すれば大きな成果があがるものと期待を抱いていた。今回の調査地域は前回の調査地域から東へ100m程離れていた地点であっただけであるにもかかわらず，土壙３基，数片の石器片，10個近い土器片の検出だけであった。ただ，結果的にみて，本遺跡の集落範囲の把握ができた。

土壙３基が検出された付近は墓域地区の東境であろう。第３図土器拓影の（１）は梨久保式，（２～３）は井戸尻式，（４～５）は曽利式，（６）は加曽利Ｂ式に含まれると思われる。

最後に，この事業が計画段階から調査に至るまで順調に実施されたことに対し，深く感謝を致し，ご協力下さった大勢の人々に御礼致す次第であります。

（飯塚政美）

図版1　遺跡遠景

遺跡地を北側から眺む

遺跡地を西側から眺む

図版2　グリット発掘状況

グリットを南側から眺む

グリットを南側から眺む

図版3　遺構及び遺物出土状況

第1号土壙・第2号土壙・第3号土壙

土器出土状況

石器出土状況

柳　沢　遺　跡

目　　次

目　　次……(1)
挿図目次……(1)
図版目次……(1)

第Ⅰ章　発掘日誌……(2)

第Ⅱ章　遺　　構……(2)

第Ⅲ章　遺　　物……(4)

第1節　土　　器……(4)
第2節　石　　器……(4)

第Ⅳ章　ま と め……(5)

挿図目次

第1図　地形及びグリット配置図……(3)
第2図　土器拓影……(4)

図版目次

図版1　遺跡遠景
図版2　グリット発掘状況

第Ⅰ章　発掘日誌

昭和59年10月24日　晴　本日，北丘B遺跡にあるテント2張りをとりこわし，柳沢遺跡へトラックにて運搬する。テントを南北に長く2張り並べて建てる。夕方までかかってテントを2張り建て，道具をテントの中へ入れる。

昭和59年10月29日　晴　グリット掘りを開始する。ＩＰ94を基準にして北へ向ってグリットを設定する。一辺を2ｍ×2ｍとし，市松状に掘り進めていく。全面的に表土面から50～60㎝位下った面に山麓からの押し出しによる礫層が堆積していた。遺物の出土は何もなかった。

発　掘　風　景

昭和59年10月30日　晴　昨日に従ってグリット掘りを北へ北へと進めていく。市松状に掘り進めていくとところどころに凹み状の個所があった。この面までの深さは1ｍ50㎝程あり，部分的に流れによる礫が重なっていた。この付近の礫も自然のものであった。須恵器の細片が出土した。

昭和59年10月31日　晴　本日もグリット掘りを，北へ北へと進めていく。遺物の出土は何もなかった。本日をもって，北側の猪の沢川南河岸段丘突端面に達する。グリット掘りの状況は前日，一昨日とほぼ同じであった。全般的にみて，北側へ寄った方に大きな礫が累々としていた。

昭和59年11月2日　晴　本日もグリット掘りを北へ北へと進め，掘りたりない部分を精査してみると，わずかに数片の土器片が出土した。夕方までに一応，グリット掘りを完了する。

昭和59年11月8日　晴　発掘器材のあとかたづけ，テントをこわし，器材の運搬をする。

昭和59年12月～昭和60年1月　図面の整理，原稿執筆，報告書の編集，印刷所へ送る。

昭和60年2月　報告書を刊行する。

第Ⅱ章　遺　　構

今回の発掘調査実施地区内でも何も検出されなかった。　（飯塚政美）

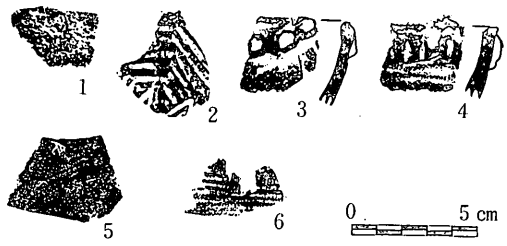
第1図　地形及びグリット配置図　（1：500）

第Ⅲ章　遺　　物

第1節　土　　器（第2図）

今回の発掘調査で出土した土器片は10点程であったが，そのうちの6点を図に掲載した。（第2図（1））は無文であった。少量の雲母や長石を含み，赤茶褐色を呈し，焼成は不良である。縄文早期終末期に位置づけられると思われる。（2）はヘラによる幅広ろの沈線が綾杉状に配されている。赤黒褐色を呈し，少量の雲母を含み，焼成は良好である。縄文前期末葉から縄文中期初頭に位置づけが可能と思われる。

（3～4）はともに口縁部破片である。口唇直下に隆帯を貼り付けてある。（3）は隆帯の上に指頭圧痕を連続的に押捺し，これが結果的には眼ね状にみえる。（4）は隆帯の上に刻目を施してある。（3～4）はともに赤茶褐色を呈し，少量の長石を含み，焼成は良好である。縄文後期中葉頃に編年づけられよう。



第2図　土器拓影

（5）は無文である。少量の雲母を含み，焼成は良好で，茶褐色を呈す。縄文後期中葉頃の精製土器の一派と思われる。（6）は須恵器の破片であり，平安時代と思われる。

第2節　石　　器

今回の調査で出土した石器は全てで4点であった。全て大部分破壊されていて実測図をとる価値がないものとみて割愛した。4点とも打製石斧片であり，硬砂岩を利用している。

（飯塚政美）

第Ⅳ章　ま　と　め

今回の調査地域は実際には周知の遺跡には指定されていなかったが，猪の沢川の右岸河岸段丘突端面に近いとのことで，もしかしたら，遺跡が存在するのではないかと疑問を持ち，分布調査的な調査を実施した。

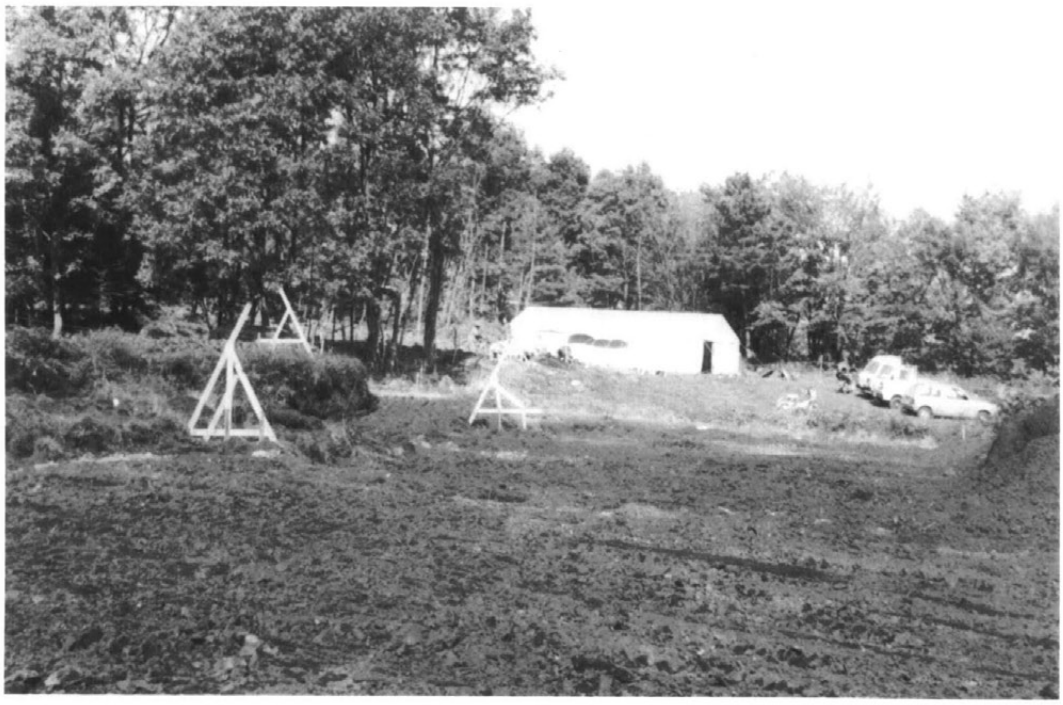
調査を実施してみると，大きな礫や砂の堆積が多く，自然状態が安定していないことが判明した。これらの砂礫層は猪の沢川の氾濫や，山麓線よりの度重なる流出の結果生じたのであろう。従って，この地域は原始人達の居住地域ではなくて，むしろ，狩猟・漁撈・採集の地域と思われる。

今回の調査で出土した土器・石器は破れ口が摩滅して丸くなっていたので，上からの流れによって調査地区内に運搬されてきた可能性が強いように思われる。次に第２図に掲載されている縄文土器と須恵器を編年的に述べてみることにする。

（１）は茅山式系統，（２）は下島直後式系統，（３～４）は加曽利Ｂ式系統，（５）は加曽利Ｂ式系統，（６）は須恵器Ⅲ式に属していると思われる。石器は打製石斧系統が全てであった。最後に，調査にお世話になった方々に厚く感謝を捧げるとともに，御礼致す次第であります。

（飯塚政美）

図版1　遺跡遠景



遺跡地を南側より眺む

遺跡地を北側より眺む

図版2　グリット発掘状況

グリットを南側より眺む

グリットを北側より眺む

山の下遺跡

目　　次

目　　次……(1)
挿図目次……(1)
図版目次……(1)

第Ⅰ章　発掘日誌……(2)

第Ⅱ章　遺　　構……(2)

第Ⅲ章　遺　　物……(2)

第1節　土　　器……(2)
第2節　石　　器……(4)

第Ⅳ章　まとめ……(5)

挿図目次

第1図　地形及びグリット配置図……(3)
第2図　土器拓影……(4)
第3図　石器実測図……(4)

図版目次

図版1　遺跡遠景
図版2　グリット発掘状況

第Ⅰ章　発掘日誌

昭和59年11月28日　晴　本日より藤沢川の南側にある山の下遺跡の調査に入る。調査は西部送水管の通過する範囲だけに限られている。さらに，藤沢川の南岸低位段丘面に該当する位置なので，分布調査的にグリットを入れてみる。グリット内は砂や礫の堆積が多かった。これらに混じって弥生後期の土器片が出土した。土器片の割れ口は丸味が多く流れてきた傾向が強いように思われた。

昭和59年12月３日　晴　引き続き，土器片が出土したグリット付近を拡張して精査する。土器片の出土は多いが流れとみてよかろう。

昭和59年12月～昭和60年１月　図面の整理，原稿執筆，報告書の編集，報告書を印刷所へ送る。

昭和60年２月　報告書を刊行する。

発掘風景

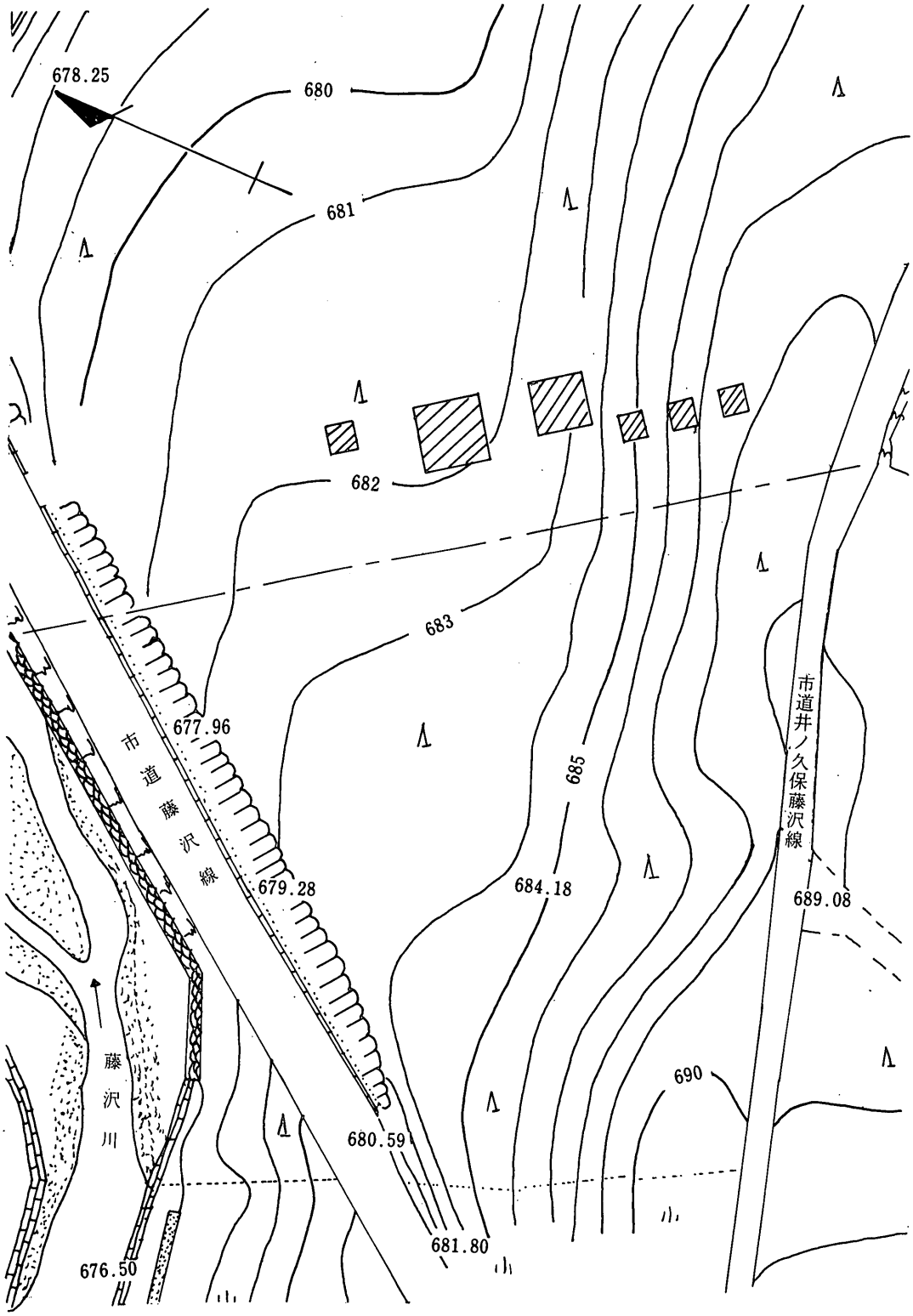
第Ⅱ章　遺　　構

今回の発掘調査地区内では遺構の検出は何もなかった。

第Ⅲ章　遺　　物

第１節　土　　器（第２図）

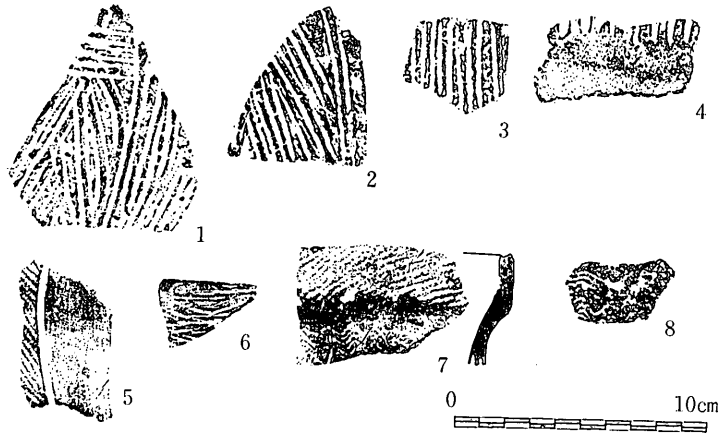
第２図に掲載した土器片は文様特色を良く描きだしている。（１～３）は半截竹管による沈線文が顕著な土器片である。（１）のなかにわずかにボタン状に貼り付けた個所がみられる。よって，これらは諸磯Ｃ式の一派と思われる。黒褐色を呈し，焼成は普通で，多量の長石を含む。



第1図　地形及びグリット配置図　(1：500)

（4）は破片上部にヘラ状工具による刺突文が加飾されている。多量の雲母を含み，焼成は良好で，赤褐色を呈する。縄文中期中葉頃と思われる。

（5）は無文部と，沈線による懸垂文と，斜縄文地と文様帯が明瞭である。少量の雲母を含み，焼成は良好で赤褐色を呈す。加曽利E式の新しい方であろう。



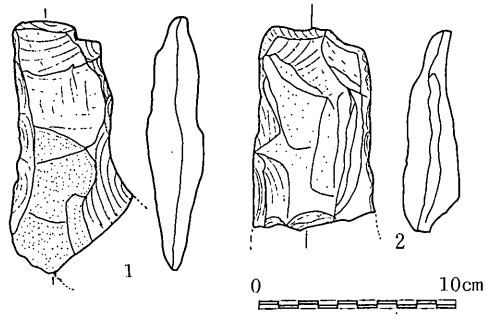
第2図　土器拓影

（6）は外面に条痕文がつけてある。黒褐色を呈し，焼成は良好で，少量の雲母を含む，縄文晩期に盛行する条痕文土器の一派であろう。

（7～8）は同一個体であろう。口唇上部は細かな斜縄文が，下部は波状文がみられる。赤褐色を呈し，少量の長石を含み，焼成は良好である。弥生後期中島式に属する思とわれる。

第2節　石　　器（第3図）

今回の発掘調査で出土した石器は3点あり，そのうち2点を掲載した。(1)は下部が欠損しているが，下部が開く撥形の打製石斧であり，作りは割合にととのっている。硬砂岩を利用している。(2）は1と同様に下部が欠損している。短冊型の打製石斧であり，かなり重量もあり，断面は分厚くなっている。硬砂岩を利用してある。



第3図　石器実測図

第Ⅳ章　ま　と　め

今回調査を実施した地域は山の下遺跡の範囲内からはずれていると思われた。よって発掘調査を分布調査的な方法で実施した。調査を実施した付近は藤沢川右岸河岸段丘突端面にある。現河床より比高３ｍ位の低位段丘に該当し，現在でも大水の時などには水が浸してきそうな危険な所である。従って，発掘調査を実施する以前はおそらく遺物は何も出土しないものと決めつけて，分布調査に着手した。

いざ，実際に掘り始めてみると，表土面より50cm位下った面に細礫と砂層の堆積がみられ，明らかに流れていることが確定した。流れた割には土器片の出土が多かった。土器片の中には弥生後期中島式土器片が含まれていた。弥生後期と言えばすでに上伊那では水田稲作が完全に定着した時期と結論づけられている。その時の水田はどこにあったのであろうか，藤沢川の面では川幅が狭く，湿地帯が全く無いと言っても過言ではない。おそらく天竜川氾濫面か，諏訪形南部堂沢川湿原地帯までわざわざ米作りに行ったのであろう。

昭和57年度に発掘調査を実施した鳥井田遺跡，横吹遺跡，城の腰遺跡の住居址群を構成した人々と，距離的にみて同一血縁関係にあったのと推測される。いわば弥生後期の村の様子及び当時の人々の行動範囲がある程度想像できるのではないか。

分布調査の状態からみて，広範囲の調査を実施したならば遺構の発見はあったものと思われる。第２図の土器拓影の土器片を編年的に考えてみる。（１～３）は諸磯Ｃ式，（４）は井戸尻Ⅲ式，（５）は加曽利Ｅ式，（６）は縄文晩期氷式，（７～８）は中島式であろう。

最後に，晩秋から初冬にかけて，寒い日，霜柱のある地面に立ち向って直接発掘作業に従事して下さった作業員の皆様，及び調査に献身的に協力下さった各位に対し，厚い感謝を心から致します。

（飯塚政美）

図版1　遺跡遠景

遺跡地を東側より眺む

遺跡地を南側より眺む

図版2　グリット発掘状況

グリットを南側より眺む

グリットを発掘調査する

名廻・北丘B・柳沢・山の下遺跡

——緊急発掘調査報告——

昭和60年2月25日印刷

昭和60年2月28日発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　ほおずき書籍株式会社